

制作現場にエールを送れる活動を！

古川柳子

入会承認、ありがとうございます。
1980年代、90年代の二十年間、テレビ朝日の報道、ドキュメンタリー番組の現場で大きくうねる時代と向き合い、2000年代は大学院との2足の草鞋をはきながら、テレビのデジタル化やクロスメディア化と格闘してきました。

悩みながら、躓きながら、でもすごく楽しく多くの経験をさせてもらったテレビ局を今年3月に卒業し、4月から明治学院大学で教鞭をとっています。

研究関心としては、媒体が多様化し「マス」が「コミュニケーション」を始めた新たな「マス・コミュニケーション」の在り方を模索しておりますが、こういう時代だからこそ、社会や時代を見つめる眼、あふれる情報を「表現」に紡ぐ技が、改めて求められていると強く感じています。テレビ現場にいたとき、ギャラクシー賞は多くの勇気を与えくれました。今、制作現場で奮闘している皆さんに少しでもエールを送れる活動ができればと願っています。

新入正会員自己紹介

ラジオを聴いて！

松浦正和

卒業以来ラジオ番組の制作会社を振り出しに、気が付けば30年以上ラジオの制作に携わってきました。自分の中学・高校時代は深夜放送の黄金期で、学校では前日の番組の話題で友人と盛り上がったものです。音楽はラジオが主な情報源でした。夕食時は家族でテレビを観ていても、夜が更けると自室で勉強をしている振りをしながらラジオに耳を傾け、パーソナリティの話にうなづいたり笑ったりしていました。私にはラジオは無くしてはならないメディアでした。それが今やラジオは災害時だけの話題となり、ラジオを触ったことのない若者も少なくありません。このままラジオメディアは衰退してしまうのか？

昔はラジオにかじりつき、今では送る側となった私はラジオの復権を願わずにはいられません。そのためにもただ自分が番組を作るだけでなく、良質な番組を知ってもらい聴いてもらい、ひとりでも多くの方にラジオの魅力を伝えるお手伝いをさせていただければ幸いです。

新入正会員自己紹介

私の仕事はテレビを見ることです

宮崎美紀子

歌舞伎や宝塚、小劇場ばかり見ていた大学時代、「芝居を見て給料をもらえる仕事はないか」と考え、見つけたのが新聞社の文化部記者でした。

一九九二年、中日新聞社に入社、一九九六年に東京新聞放送芸能部に。以来、時々別の部署に異動させられては戻されの繰り返しです。

演劇記者を志していたものの、ハードもソフトも人も常に変化していく放送が面白くなってきました。生来のテレビっ子で新しいものの好きというのも幸いしたようです。

放送記者としての私のスタンスは、放送を「行政」や「経済」ではなく「文化」として捉える。そして番組を見る、記憶する、記録する。一般にくだらない、電波のムダ使いと言われるものもある。新聞記者ぶって頭の良さそうな正論ばかり言わない。有益、無益、上質、下品、全部ひくるめて「放送文化」であり、時代と国民性を映す鏡であるという考えのもと、偉い記者である前に良き視聴者でありたいと思っています。

新体制で初の理事会 さまざまな議題に議論白熱

―7月理事会報告―

7月23日、7月理事会を開催した。開会にあたり今期から新理事となった鈴木嘉一理事、田中早苗理事、中町綾子理事、藤久ミネ理事よりご挨拶をいただいた。（小林毅理事は欠席）

1 委員会活動報告

◇出版編集委員会 飯田委員長
・総会後の6月27日と7月17日に編集会議を開いた。10月号の特集は「ナレーション考」。表紙はミムラさん、パーソンは検討中。

・「TV BEST&WORST」を10月号から「テレビ&ラジオBEST&WORST」に企画変更するので、身近にいるラジオが好きの方に投稿をお願いします。大学の先生方は学生さんにラジオ番組でいいものがあつたらぜひ投稿するようにお願いしてください。

・選奨事業委員会のページも基本的には踏襲していきますが、すでにテレビ委員長の丹羽さんからは若干の変更の依頼がありました。ほかの部門からもありましたらおっしゃってください。

小田桐理事から質問があつた。小田桐「校正なのか校閲なのか、僕が編集長の時を含めて校閲をきちんとやったという状況だと認識してないんですけど、編集予算をアップすると言っていましたね。丁寧にきちんと校正し間違えのないものにするためにアップした編集費を具体的に何に使うんですか。例えば固有名詞などが間違っていないかの校正にあてるのか、事実関係も含めて校閲の人件費に当てるのか」

飯田「基本的に校正、校閲につい

ては正会員の有志にお願いしている。校正だけではなく、校閲も含めてやっているという認識で関わっていただいているので、今後も校正も校閲もお願いしたいと思う。足りない人員の中でそれぞれが校閲したいと思っています。アップした編集費については校正、校閲者を新たにお願ひするというのはなくて、むしろ編集として今までの予算がないので抑えてきた地方への取材費、あるいは写真を使いたいけど写真代が出せなくて使えなかったところに使いたいと思っています」

小田桐「若干の認識の違いがあるのかもしれませんが、例えば肩書きをきちんと確認するとか引用している文献の書名はそれでいいのかということまでやるのが校閲なんですよね。今そこまでやるようになったんですか」

飯田「例えば引用文についてはできる限りやっていますが、正直そこまで手が回らないのが実情です。私としては取材費にもう少しかけたいので、信頼できる校閲者を雇えるほどではない」

小田桐「先だって写真の使用ミスがありましたけども、写真に対する著作権の管理ですとか、写真の使用のプロセスのチェックであるとかそういうことができる人はいることはいるんです。提案ですけど、そういう人をきちんと入れたほうが編集のクオリティということでは上がっていくだろうし、間違いも少なくなっていくだろう。僕の知っている人なんかは写真の使用許可や校閲にうるさいくらいで、それくらいの校閲者をおいたほうがいいと思います」

飯田「予算さえ許せば本当に私もお願いしたいと思っています。ぜひその方を紹介してください。ただしギャラが見合えばですけれども。その折り合いです。そこは検討したいと思いますので、小田桐さんにも推薦していただければと思います」

◇選奨事業委員会 藤久委員長
〈テレビ部門〉 丹羽委員長

今月から私が担当するのですが、6月分の月評会に関しては前期の委員会が担当しているの、上滝さんお願いします。上滝「48期、49期の最後の月評会を6月29日に開いた。月間賞に「おしゃべり独居ばあさん」(中部日本放送)「探検バクモンSP 爆笑問題の沖縄入門」(NH

K)「ETV特集 飯舘村一年(人間と放射能の記録」(NHK)「リーガル・ハイ」(フジテレビ)を選びました。これをもって任期を終えることになりました」
丹羽 テレビ部門の委員に一人追加したい。選奨事業委員長の藤久さんを推薦する。新規委員もたくさんいますので経験豊富な立場から、アドバイスしていただきたいということがあります。

↓拍手で承認
丹羽 第1回は7月30日に開催予定。
〈ラジオ部門〉 桜井委員長

・ラジオは7月7日に「ギャラクシー賞入賞作品を聴いて、語り合う会」をニッポン放送のイマジンスタジオで開催した。参加者は一般が47名、学生が1名。今回聴いたのは毎日放送の「鉄になる日」とDJパーソナリティ賞の吉田尚記さんの「ミューコミプラス」で、吉田さんの番組で招待した20名も加えて全部で68名。学生さんも含めて若い方が多かった。懇親会に34名が参加し交流を深めた。
・7月18日に合評会を開いた。新委員会としての初めての合評会で、TOKYOFMの「Blue Ocean」とTBSラジオの「たまむすび」という、テレビでアナウンサーをやっていた方がラジオで始めた番組を聴いた。

伝わってる？動かしてる？

河合良文

広告会社のクリエイティブ部門から大学教壇に転身して4年目になります。一行のコピーのために徹夜し、クリエイティブ・ディレクションに呻吟し、ときに海外広告審査員として彼我の違いを痛感し、の35年間でした。いまは現場での経験を体系的にとらえ直すこと、なにがしかのエッセンスを若い世代に伝えることを、テーマにしています。

周知のとおり広告をとり巻く環境は、ひたすら難しく厳しくなっています。でも幸いなことに(一)学生諸君の興味・関心は衰えていません。世の中を少しでも明るく楽しくまっとうにするために何かを伝えたい、との思いは普遍的なものなのでしょう。

ちなみに所属のメディア表現学科は『発信！人に伝わるメッセージ』、人を動かすメッセージ』をスローガンに掲げています。伝わる、しかも感動や行動を伴って……めざすところは放送番組もCMも同じじゃないか！そんな気持ちで、放想に参加します。どうぞよろしく。

新入正会員自己紹介

ラジオキュレーターの眼

紺野望

民放ラジオに未来はあるか？最近これをテーマに人と会い、考えています。広い視野からある形を紡ぎ出すキュレーター。この視点から得た新しい提案はできないか。そんなことをライフワークとしています。

最近コミュニティFMから学んだことは、人と人が結びつき繋がっている実像です。ラジオは受け手との距離が近く、信頼感が醸成されやすい。放送とネットそしてイベントの三つが立体的な形で場を提供し、そこに出会いや交流が生まれる。この小さいながらも確実に繋がるラジオの力は、地域活性化の(打出の小槌)として国や自治体が入れている「ソーシャル・キャピタル」(社会関係資本)に果たす役割が大きいのではないか。

ひょっとしたらラジオ復活のキープイントになりそうな気がします。「寄り添うメディア」から「繋がるメディア」へ、そして受け手の活動(市民活動)に寄与できるメディアになれば、新たな社会的役割を果たすことができるはず。期待します。

新入正会員自己紹介

テレビは「社会を映す鏡」であり続けられるのか

鈴木健司

どうぞよろしくお願ひいたします。私は広告業界誌の編集者を経て、フリーのライターとなつてからは『放送文化』『調査情報』、そして『GALAC』などの専門誌で、特に制作現場への取材を通して、テレビのさまざまな話題を書く機会をいただいております。

私がテレビのことを書くようになってきたきっかけは単純で、生まれついていた「テレビ好き」だったからに他ありません。それは今も変わりなく、仕事場にあるテレビは、常に付けっぱなし。ニュースから情報番組、バラエティ、スポーツ、ドラマ、ドキュメンタリー……特に、地上波の総合編成の肝は、やはり「社会を映す鏡」としての機能だと思っています。

しかし近年では、その鏡が曇っている、あるいは何らかの理由で映さないようにしているのではないかと聞いた、メディアの姿勢そのものを問う厳しい指摘も聞かれます。存在をも否定されかねない声に対して、テレビに携わる人たちは、今こそ真摯に向き合うべきだと思います。

・2012年度事業計画で1名増員予定だったが、日経ビジネスの柳瀬博一さんをラジオ委員に迎えたい。
↓拍手で承認
〈CM部門〉 五井委員長
・7月13日に新しい体制でのCM委員会を行った。前回の理事会で、CMの委員会は3か月に1回だったのを月に1回やりたいということでご承認いただきましたが、全委員からの承諾を得た。新しい委員はCMの経験者が多いので、前向きかつ建設的な意見が飛び交いまして、これからどうやって舵を取っていくのか悩んでいるところです。月に一回やるからにはどういう格好で運営していくか話し合ったのですが、来月はそれぞれが気になるCMを3本ずつピックアップして議題にしようと思つていました。「GALAC」の執筆順も決めました。

〈報道活動部門〉 鈴木委員長

・7月19日に初めての会合を持ちまして、11人の委員の内7人が出席。大きなテーマが3つ。ひとつは報道活動部門をどう盛り上げるか。というのは応募作品の10年間の本数の推移を調べたら1回目38本で一番多くて、翌年が34本、3回目以降はずっと20本台なんです。去年は前半が6本で果たしてこの部門が続くのだから

明るい方向を見ていきたい

池本孝慈

私は広告人ですので、仕事でのラジオとのかかわりは主にラジオCMになります。音声だけで勝負するラジオCMは、制限がある分クリエイティブチャレンジができるのが魅力です。ニューヨークの朝は早い、とナレーションを入れるだけで、気分はもうニューヨーク。アイデア次第で宇宙にも、過去や未来にも行き放題。ラジオでなければこんなことはできませんよね。

ラジオには底力があると思います。ソーシャルメディアと最も相性がいいのもラジオだと思っています。新しい楽しみ方も生まれています。ラジオは終わり。そんな声もよく耳にしますが、一方でこれだけ可能性を秘めているメディアは他にないんじゃないか、とも思ったりするのです。

広告人として、クリエイターとして、リスナーとして、私はこの明るい方向を見ていきたいと思っています。

たくさんの可能性を見つけていければ、と思っています。どうぞよろしくお願いします。

新入正会員自己紹介

テレビ制作から映画製作へ

稲塚秀孝

かつて『遅れてきた青年』という大江健三郎氏の小説があったが、今回放送批評懇談会に入会することになりました稲塚です。

1973年にテレビマンユニオンに参加以来、テレビ番組を作り続けて40年が経ちました。2005年からは、ドキュメンタリー映画を製作し、国内外で上映しています。

「二重被爆」語り部・山口彊の遺言（2011）、「フクシマ2011（被曝に晒された人々の記録）（2012）」に続いて、「書くことの重さ」作家 佐藤泰志」と「この町で生きると決めた」フクシマ2013」の2本を製作中。来年春完成予定です。何故そういう道に入ったのかというと、企画がテレビでは受け入れられなかったから……。そこで「眼から鱗が落ちる」ことになった。テレビ番組制作で得られなかった「著作権」が手に入ったのである。今では映像コンテンツを作り続けることに邁進している日々。家計は苦しいが、撮りあがった作品を見てもらえることが嬉しい。

新入正会員自己紹介

好奇心とオッチョコチョイ

小川幸子

かれこれ40数年、CM業界の片隅で仕事をして来て、昨年春、創立に加わった会社「ザ・ないん」を退職した。その前はテレビ番組制作会社のテレコムジャパン（現テレコムスタッフ）CM部門テレコム―2に在籍。今回入会も、何かの縁を感じる。宣伝部や代理店所属の制作者の方々とは違い、様々な広告主のCMを担当する事が多く、其れ故か？飽きずに愉しんでその時々役割を勤めさせて頂いた。気が付けばアツと言う間、好きだったからこそだろう。他に理由が見付からない。

広告表現はシニタイでは無く、その時代の中で「生きてる」事が条件だ。アナログからデジタルへ、変わっても変わらないモノ。秀れた制作物には必ず潜んでいる。会員へのお誘いを受け為せて頂いたのは、私の長所「好奇心」と短所「オッチョコチョイ」の結果。どうか、宜しくお願い致します。五井委員長とは平成元年カンヌCMフェスティバル参加でホテルが同室になった事、その御縁は、今も続いている。

うかという危機感がありました。応募してくるところも固定化してきていまして、中国国からは出てきていないのもわかりました。

二つ目は報道活動部門が出来て丁度10年という節目に何をするのか。

三つ目は報道活動受賞を見て制作者と語る会を今年もやるのかということ。ひとつ目と二つ目に関してみんなの意見は10年たっても放送界でまだ必ずしも浸透しているとは言えないのではないかと、もうちょっと周知徹底する必要があるだろうと。10年ということもあり「GALAC」との連動でミニ特集的なことをやっていきたいということと、「GALAC」の報道活動のページをもうちょっと活用して、それぞれが目にした報道活動を発掘するということを軸にしてはどうかと。

三つ目の制作者と語る会については10年ということもあり、やらない手はない。49回はIBC岩手放送や伊万里ケーブルテレビ、TBSテレビなどいいものがあった。ただお金の問題と個人に負担が多くなるのはどうだろうということもあったのですが、放懇からお金の助成もあるということで、やりましようということになりました。場所は過去4回大学

でやっているの、ある大学と交渉中です。10年ということをやっと意識して会をやろうと進めている。

議長「今の選奨事業委員会の活動の報告で、ご意見提案がありましたら」

小田桐「ちよつと質問です。テレビなんですけど、毎月月間賞を選んでいるわけですが、顔ぶれを見ると仕事で忙しい人もいるでしょうが、活発な意見を交わしてほしいのです。今度月間賞で決まった作品を報告するときに例えば何人の委員がきちんと出席していたか報告してほしい。書面で出席の人も含めてですが。それから、各委員が番組を推薦した場合、見てない委員がいた場合、見てない委員の方も見た形で議論してほしい。なかなか難しいと思うんですが。時間のない中で。少なくともきちんと実行していたかないと月間賞のクオリティは守れないんじゃないのかな」

藤久「こういう形で議論していたら、いくら時間があっても足りないから、いまおっしゃった原則を委員長は重々わかっていらつしゃると思うし、そういう形の確認があつたということにさせていたいただはどうでしょうか」

田中「それっていうのは結局事前にある程度委員長なりなんなりが、これがだい

たい月間賞になるだろうと予想してみんなに見てもらおうということなのですか」小田桐「いやいや委員長じゃないですよ」田中「でもみんなが見るということはそれなりに、優秀だと思われるものをピックアップするということですよ。それは予断が入ってしまうんじゃないですか」

上滝「議論し出すと長くなるんですが、オールマイティの委員を選んでいるわけではないんですよ。現実にはバラエティからドラマからドキュメンタリーからみんながカバーしていくのはきつい。私の中にはドキュメンタリー、バラエティ、ドラマと三分の一ずつやって自分のホームグラウンドは目配りしておいて選んでいくわけです。それを全員がすべてのジャンルを目配りするのは結構難しい。もう一つは票で言うところと3票とか2票で説得力のあるものを選んでいくので、何票入れたかということはなかなかやりにくい。4票あつても議論の中で2票のものが説得力があつた場合選ばれる。それを固定的な数で報告するのは難しい。もう少し討議しないと。選奨は議論のなかで動いていくものですから、形式的に報告すると、生きている選奨からはずれていくような気がする」

小田桐「議論の中で動いていくのはわかります。三分の一ずつ各ジャンルでやっているのなら三分の一に関わる委員がきちんと。例えば月間賞に推薦された作品が一人か二人だけしか見ていなくてというのもあるんでしょうが、議論というのは番組を見ていないと議論にならないですよね。見ていない作品について議論するのは非常に難しいと思います」

上滝「月評会がいつも月末に行われて、締切りがあります。そこで推薦されたものをもう一度見てというのはちょっと不可能かなと。一か月見た中でこれがいいと推薦が出てくるので、それを皆さんに回して見る時間はない気がします」

小田桐「藤久さんが委員長の際に、ある日にちを決めて、それまでに気になった番組を出してくださいということをやってませんでしたか」

藤久「そんなことしたことないです。番組は見た人と見ない人がいるのはしょうがないです。見た人の意見が信用できれば、それに逆らわないである程度そこに流れがいくかたちでやっていって別段おかしいことはないような気がします、丹羽委員長どうですか」

丹羽「しばらくテレビ部門は離れてましたけど、2人か3人が見ていて納得され

て、いい番組ということになれば、それが月間賞になるというのは行われていました。逆に全員が見なければその番組について議論できないとなると、毎月選んでいく月間賞の仕組み自体が維持できなくなるのではという気がします。勿論応募作に関しては別の対応があると思いますけど、日常の視聴を前提に委員が日常の中で番組をウオッチして推薦番組を挙げて毎月いい番組を選んでいくという月間賞の仕組みの中で、全員が見なければ議論できないとなると維持できないのではという気がします」

田中「応募作も2人の意見が重視されるんです」

藤久「2人ないしは3人ですね。今丁寧な話し合うのはどうかと思うので、テレビ委員の中で具体的な話し合いをして次の理事会でまたご報告します。なるべく大勢の人間がある程度の番組を共有することができるような方法が当然考えられると思います」

《第49回ギャラクシー賞贈賞式・懇親会決算報告》中島事務局長

橋本専務理事より、贈賞式当日ホテル側に小さな不手際があり、ホテルよりお詫びの連絡をいただいたとの報告があった。決算は承認された。

◇マイベストTVプロジェクト 滝野プロジェクトリーダー

・7月20日に今期第1回のミーティングを行って、今後の進め方について打ち合わせをした。第一の課題は特に若い男性会員が少ないので、新しい会員獲得に向けての方策としてはツイッターを活用していく。ツイッターをホームページ上で表示して、少なくとも1日2、3回はつぶやくようにする。これはマイベストTVプロジェクトメンバーが担当する。

・入賞作の偏りをなくしていくためにこれまで3本だったのを5本選ぶことにする。同時に任意に投票できる制度を廃止する。あくまでもマイベストTVはテレビの選奨委員会が選んだ作品とマイベストTVプロジェクトメンバーが追加した作品でふるいにかけて候補作から選ばれる賞にしていく。

2. 50周年委員会報告 橋本専務理事

50周年事業に関して委員会を立ち上げたが、実務面の進行が遅れているので、委員長、副委員長、入江式典担当、事務局、音理事長で検討した。

その結果を提案するとして、①基本的な考え方②贈賞式・懇親会の開催日・会場③式典当日の記念イベント企画④特別賞の設定⑤関連イベント企画（シンポジウ

諮りして、そうだったわけですよ。今度、今みたいな話になれば、もつと違う方々を入れるというのを、それはその時にいろいろ考えて、私から提案するのか誰から提案するのかわかりませんが、提案して、皆さんのご意見を聞きながら決めていくということ。今までの会は、とりあえずこの間の総会で一旦は解消しているわけです。同じメンバーでやってもかまわないんですが、解散しているというふうに私は理解しています」

議長「多少ご異論があると思いますが、やるとすれば一字一句、あるいは各委員会の実情等々、あるいは考え方も聞きながら、審議したほうがいいと思いますので、たいへん申し訳ありませんが、次回ということにさせていただきます。それまでのできるだけ早い機会に、小田桐さんには答申を出していただくようお願いいたします」

以上の審議が終了した時点で理事会は既に長時間経過していた。事前に坂本理事から意見表明の要請を受けていた議題は、次回に延期することとした。

4. その他

◇入会・退会

維持会員 mmbi、ギークピクチュアズの入会

正会員 河邑厚德さん、田川義博さん、高野美穂さん、柳瀬博一さんの入会を承認。

正会員木村政司さんの退会を承認。

◇日韓中テレビ制作者フォーラム派遣メンバーの件

飯田みか編集長、川喜田尚副編集長を候補として調整。承認。

◇ギャラクシー賞トロフィーの件

トロフィーの胸に刻む「GALAXY AWARDS」に西暦年号を入れるか入れないかについて意見集約したところ、台座に年号が刻まれるのならば、胸像には必要がないという結論を得る。賛成多数。

（台座には、年号、第*回とも入れることを確認）

◇東京都への書類提出、法務局への登記作業の報告

2012年4月1日のNPO活動促進法の一部改正により法務局登記対象は代表理事1名と変更されたことに基づき、理事長以外の理事の代表権喪失の手続きを行ったことを報告。

また、所轄官庁である東京都に2011年度事業・決算報告を終了した。あわせて役員変更届け、定款変更届け（英語名称の変更）を行った。定款変更の認証までには約4か月を要し、認証決定までは

使用は不可となる。

◇職員給与の件

事務局員3名に対しベースアップを行う。業務手当の3%程度を予定する。これを承認。

◇次回以降の理事会日程

8月 休会

9月 9月24日（月）

【出席】

音好宏、橋本隆、上滝徹也、小田桐誠、飯田みか、藤久ミネ、丹羽美之、桜井聖子、五井千鶴子、鈴木嘉一、滝野俊一、石井彰、入江たのし、川喜田尚、坂本衛、嶋田親一、田中早苗、中町綾子、稗田政憲、中島好登

会議記録

7月

13日	(選奨) CM定例部会
17日	出版編集委員会
18日	(選奨) ラジオ定例部会
19日	(選奨) 報道活動委員会
20日	マイベストTVプロジェクト会議
23日	理事会
30日	(選奨) テレビ月評会

あるし、だとすれば時間をきちんととって、しっかりやらないとできないことではないか。

これは音理事長がおっしゃったように、先行きのことはなく、過去の改革みたいなものになっているとすると、我々小委員会委員の認識の問題もあったけど、先のことがないわけだから、それは宿題、次の課題として、必要なら第二小委員会を作ってそこで議論するのが、一番論理的かつ成果が見えてくるのではないかと思えます。提案です」

藤久「もう一度小委員会を作ってやり直す？」

議長「これは、すでに終わってしまつて、委員の数とか賞の数とか名称とかの答申案ですが、結果的には答申になるわけですが、それに関しての議論はできるわけで、音理事長が考えていらつしやる部分は、我々委員の中では認識が薄くて、そっちに行くより現実問題に議論が集中した。テレビの作品の選び方の問題点、今の欠点みたいなことに議論が集中した感もありました。二人しか見てないことをどうしようかということがずーつと議論になってきたので、なかなか先まで行かないうちに時間が来ちゃったというのが、率直に言うの実情であるんです。現在の

委員長が集まつてやっているから、今やっていることが正しいのか間違っていないのか、改革の余地があるのかないのかを考へるのに、主たる頭脳がいつてしまったのが実情です。理事長が所感を述べられたわけですから、そのことを尊重しながら、必要なら第二次の小委員会を、どういう形でつくるか、委員をだれにするか、また改めての話ですが、作って、ここに答申が出てない部分に関してはそこで検討するというのが一番わかりやすいんじゃないでしょうか」

藤久「ということは、これに関しては次回、もう一度……」

橋本「答申を出していただけるということですから……」

上滝「答申案を受け取ったわけですよ。ここで。そこで揉んでいくということですね。僕は形にこだわっているわけじゃないですよ。しかし現実には諮問内容が曖昧になっていくわけですよ。いま。理事長はCSやケーブル、ネットなどいろんなメディアが出てくる中で、発展的なギヤラクシー賞をどう考へるか。そういう諮問の内容まで含めてここで討議をするということですね」

五井「だから、発展のためのという視点がまるつきりなかったわけですよ。そこ

を違う委員会、第二次の委員会を作つて、そのための議論を……」

上滝「委員会もう一つ作ろうとか、そういう討議をしてと」

議長「だから答申が出たら答申に関して議論して、たらない部分があればもう一回やるのか、新しい委員会作るのかみたいなことをみんなで議論してやりませんかという提案です。ちよつと時間がかかつてしまつて、本当は50回大会までに改革をというつもりでしたが、実質的にできないし、拙速にやることはないの、きちんと議論しながらやるのが大切だなと思つています」

稗田「これでカバーされているものとカバーされていない部分に分けて、カバーされていない部分は次回に回すということにして、答申されたものについて協議して、これはダメだということは直す」と

藤久「ここに答申されていない問題については、これまでの小委員会のメンバーでは、新しい方向に発展するかどうかは分からないですよ」

議長「それはギヤラクシー賞改革小委員会だったので、選奨委員長からの提案だったので、各委員長に入つていただくのが適当じゃないかというのを皆さんにお

ム等)の内容が説明された。(詳細略)

その後議論した。日時の設定(地方局の方の参加しやすさへの配慮が肝要との石井理事からの提案)、関連イベントに關しても多くの理事から提案、意見、問題点が出された。結論として会場と開催日時は現時点で決定する必要があり、来年6月3日(月)ウェスティンホテル東京に決定した。

特別賞に関しては、各選奨委員会からの候補者(ないしは候補作品)の推薦と会員からの推薦等を経て最終的には常務会にて決定することが承認された。複数の特別賞を選考する方向で了承された。

また、シンポジウムに関しては多くのアイデアが出されたので、会場・期間・費用等、50周年委員会として順次、案を策定し、理事会に諮りながら決定していくことを了承した。

橋本専務理事から格別の協力を要望された。

実務的には、実施に向けて少数のグループを作ることが必要と考へていることも示された。

3. ギヤラクシー賞改革小委員会答申案について

小田桐「『答申案』の内容は詳しくは5月の理事会で説明した。13人のメンバーで

座長は自分が務め、8回の会議を開いて答申案をまとめた。メンバーの中で出席できない人は文面などで参加した。最後に、5月15日に小委員会を開いてまとめ、出席者全員で確認したものを5月24日の理事会に報告した。15日の委員会が終わった後、私がまとめた文章に加筆訂正があれば、理事会前までに連絡をくれと全員に連絡を取った上で、5月24日の理事会に提出しました」

坂本「答申したということは、諮問があったのですか？」

上滝「関連して、理事会が諮問して小委員会が答申したのか、理事長が諮問して小委員会が答申したのか。その辺をはつきりしておきたい」

坂本「諮問しないと答申は出ないでしょう」

小田桐「理事会が決めたんでしょう？第7回の総会で『選奨事業については、これまでの歴史と伝統を生かしながらも事業全体と4部門の問題点を洗い出し、改善・改革を進めることで、ギヤラクシー賞のクオリティと社会的な存在意義をさらに確かなものにした』ということが承認され、それを受けて7月の25日の理事会でやっていきましようということになった。委員をだれにするかにあたつ

ては、理事会で報告しましたし、音理事長も委員になつていただいて、正式にスタートして8回の会議を開いたということ。総会はこの会の最高機関、理事会が次の意思決定機関。総会で確認して、キチンと50周年に向けて理事会に諮つていつて、メンバーを決めていきましよう。それ以降については議事録であるとか、5月の理事会には配りましたが、進め方も目的も確認しましたし、そういうことはもう何遍も僕は説明しているはず。一方的に私が委員会を作ったわけでもないんです」

坂本「諮問はいつ出てるんですか？」

議長「去年の7月25日の月曜日。理事会が開かれております。その中の選奨事業委員会小田桐委員長発言。『ギヤラクシー賞50周年を機に選考などのシステムを検証し、これからのギヤラクシー賞の在り方を考へる委員会の設立を提案。メンバーは小田桐選奨事業委員長、各部門委員長、音理事長、橋本専務理事、藤久前テレビ部門委員長、藤田元テレビ部門委員長、事務局から福島で構成する。今後月に1回を目途に会合を開催して、年内に一度まとめる提案があり、これを了承。』」

上滝「通常、理事長なら理事長が諮問を

しました。それに対してプロジェクトを作って答申が出てくる。それは理事会の報告事項でいいんです。その形を確認して欲しいと言ったんです」

議長「いまの文章だと、提案があつて理事会が了承して、そのまま進めてくださいうということですから、理事会ということになるというのが、私の理解ではそう思いますが、いかがでしょうか。少なくとも、音理事長から改革せよ、検討せよという話ではなかった。むしろ選奨事業委員長から見直さないといけないという話が出た。ですので、理事会が小委員会に諮問したという解釈でよろしいかと思ひます」

坂本「理事会が小委員会に諮問した。ところが答申が出てくる前に、答申案が出た。その案を理事会で採んで欲しいということですか？」

音「そうです。採んでほしいからできたんですよ」

小田桐「5月24日の理事会が始まる前、福島さんに『案』という形で渡しました。各委員メンバーに流してくれと。加筆とか修正がある場合は、理事会が始まる前に連絡くれという文章をつけて流した。小委員会のメンバーには『案』と一緒に流しました。理事会が始まる前までに、

各委員からは異論とかなく、その前の15日の小委員会でも、出席者全員でこれで問題がないということで、理事会に報告しますと。正式に言うと、理事会の前までは『案』だったわけで…」

音「でも理事会には答申案が出てきた」上滝「わかりにくいのは、理事会が諮問したと。そうすると、改革小委員会は答申案を作つて委員会で採んで、それを答申書として理事会に出す。これが答申案であるなら改革小委員会で答申書にしくはならない」

嶋田「もう一回、小委員会に差し戻してやったらどうですかね」

小田桐「僕が答申案として各委員に示す日時も遅れたので、理事会が始まる直前まで何か変更の要請があるのであれば、全員一致での答申として提案できませんから、案という形で委員には送ったわけですよ」

藤久「でも誰からも何もなかったんでしょう。それなら承認されたということで、答申にして『案』を消せばよかったのでは？」

小田桐「作業の詰めが甘く、『案』を消して5月の理事会に提案すればよかったんですが、そのまま配ってしまったということですから、1から7について、

小委員会内で異議を述べたものは一人もおりません」

五井「評価基準はものすごい揉めました。オープンにするかしらないかもめました。これはオープンにすればするほど、明文化すればするほど痩せてしまう。なので各委員会の中で、委員長がその選奨に当たるということでもまとまったと思います。6ではCMの数が14本と一本増えています。優秀賞は今までCMだけ2本だったのを3本にしてみました。ここが大きいところだと思っています」

藤久「私は選奨という名称については納得しなかったんですが、代案がありませんで、橋本専務理事から放懇50周年を過ぎてからの問題にして、また審議し直したらどうかということになって、はいと言つて引きさがりました」

坂本「内規を設けるって、これはどこに内規を設けるんですか？」

藤久「各部門です」

坂本「1もですか？」

小田桐。「1は、番組とは何かで議論になり、新しいチャンネル、ネット動画配信もあり、そこまで広げるのかという話になり、当面は『放送法』に規定するものとして、内輪で確認しよう」と…」

坂本「内輪って、放送批評懇談会のこ

らこういう諮問を受けて、委員会の検討の結果、以下の答申を得ましたので、ここに答申いたしますと。僕の中ではそう思っています、ここはもつと牧歌的に行こうよということならば、それはそれで構いませんが」

小田桐「そういうふうには正式に書きます。理事会は議論するとき、小委員会にこういうテーマで議論してくださいって議論ありました？ その時に批判すればいいじゃないですか。ものが出てきてから、あの時はこういうことだったと言われても、非常に、どういうことなんだろうとなりますよね。」

せっかく小委員会ができるんだったら、こういうことも議論して欲しい、ああいうことも議論して欲しいと。理事会で小委員会の設置は認められたわけですから。議事録も精査して、詳細なものをつけて、出します」

石井「書き方のスタイルの問題であるとか、こういう点の議論が足りないのではないかと皆さんいろいろおありなんだろうから、それは理事会で議論していいいいことで、これでとりあえず私たちは受け取ったと。案であれ答申であれ、きちんと受け取ったと。

僕が提案したいのは、いつも何か中途半

端で、坂本さん言うように「放送批評家」つて言い方はどうなんだろうとか、僕は13人というのに反対意見を持っていますが、そういうことについて一つ一つ議論を進めて欲しいんです。その方が身がある話でね」

鈴木「賛成」

石井「答申案の書き方がどうかって話では、全然ないと思うな」

田中「ただ、答申書というのは權威のものではないですか。それは尊重しないといけない。きょうは中間報告会としてはいかがでしょうか。もう一回持ち帰っていただき、正式な答申書にして採んでいただく方がいいんじゃないか。また第二小委員会というような議論をするよりは」

鈴木「形式論で、もう一時間近くやっている。それだったら、僕は報道活動部門としてこの答申案か答申書か知らないけど、これに言いたいことがある。この内容に対する意見です。手続き論、形式論ではなく。いいですか？」

議長「ちょっと待ってください。小田桐さんが正式な形で出すとおっしゃっている、というのが一つ。もう一つは次にもう一つ議論したいことがあるので、申しわけありませんが、小田桐さんの答

申が出るのを待つて、それは可及的速やかに皆さんに配布しますので、次のときには1条ごとに皆さんで理事会として答申を議論し、文脈を直し、修正・訂正をするという会議をするのはいかがでしょうか」

藤久「それなら、今、鈴木さんから意見出ているから伺つてといて、それも含めて議論しては？」

田中「理事の人にメールで意見を述べてもらったらどうですか？」

鈴木「単純に、報道活動に関わることでだけですから。原則13名とするとあります。報道活動は今11名。最大13名まではいいですとは聞いていましたが。報道活動部門はテレビ部門のように毎月集まるわけではなく、対象も広いわけではないのでそんなに多くの人数はいらないかと。これ見ると11名の報道活動は非原則みたいなので。ここは13人以内とすると変更して欲しい。あえて細かいことも言う、副委員長の規定がない。副委員長も規定された方がよろしいかと。もう一つ、6番目。優秀賞は3本。報道活動部門は今2本でして、急に3本になっちゃうのか」議長「その議論はきちんとやりたいんです。一条ごと、一言一句だつて納得できない人もいるでしょうし、解釈の問題も

と？（1の記述には『放送批評家』とあるけど）この場に『放送批評家』って何人いるんです？ 放送批評で食ってるやつって？ こんなの新聞記者に見せていいの？ 『放送批評家』って何ですかって言われるんだよ？」

藤久「だから、この答申案をこの理事会で、坂本さんがこはおかしいと指摘してくださいれば、それで話し合っていけばいいんじゃないんですか？」

坂本「そうですね。1番の『放送批評家』はおかしいし、放送批評懇談会が批評する番組が放送法によって規定されるのは全くおかしい。ふざけています」

議長「これは答申案ですね」

坂本「いや、答申書になったんだよ」

藤久「答申書にしていんじゃないですか」

上滝「答申書であれば、これは承りましたで。そこからいろんな意見を聞いて、握りつぶしたっていいし、答申書というのはそういうものです」

小田桐「そうです、握りつぶしたっていいんです。だけど、その影響は考えたほうがいいと思いますけどね」

上滝「これはここで承ってここで揉むのがいいのか。それとも答申書を受け取りましたとして、これだけのための会議を

別に開くか」

議長「もう一回整理します。答申案があったけれども…」

藤久「案はおかしいんで、小委員会の中で案に対して異議を申し立てる人間がいなかったということは、全員が承認したということですから…」

音「小田桐さんには申し訳ありませんが、前回のとき、私はこれは『答申案なんですね』と何度も確認しましたし、この文書が私に送られてきたときも『答申案』

とついていましたから、これは『答申』ではないかと確認しましたが、『答申案』だと。そういうふうにおっしゃったです

ね。『答申案』が『答申書』になるのであれば『答申書』になるので構わないのですが、とすれば、理事会に『答申書』が出されたということからすると、今までのお話しをお聞きしていると、この中身

についてもご異論がいろいろあるようなので、前回の理事会で話がありました通り、新しい理事会の中で揉まなくてはい

けない話ではないんでしうか。坂本さんのご指摘などもまさにその通りで、そういうことをやらなくてはならないんじゃないですか」

上滝「答申書であれば、これは答申書になっていません。答申書であれば、答申

は、もう少し考える必要があると思います」

議長「それでは、小田桐さんは委員長として正式な答申を出していただけますか？」

小田桐「書式を整えた答申書を出せばいいですね」

議長「ということは今は答申がないわけですから、議論はできないので、次回以降答申が出たところでそれを検討するというのが私の提案です」

坂本「それはこれと同じものが出てくるんですか？」

小田桐「そうです。委員は諸手を挙げてというわけではないかもしれませんが、これに賛成されたわけですから」

藤久「私の受け取り方では、今理事長がおっしゃったような側面は、この改革小委員会ではまったく議論の対象になって

いないんですね。ということは、もしそういうことが小委員会の目的の中に入っているんだとすれば、答申案はもう一度持ち帰って、改革小委員会を再度組織して話し合いを続行しないと、答申には至らないと思うんです。

ギヤラクシー賞それ自体の作品対象の検討とか、発展的方向とかは、小委員会の討議事項の中に全く含まれていなかった

する人間は誰なのか、答申先はどこのか。最後にはその答申をした人の名前が必要である。これを答申書として記録に残しちゃうと…」

議長「答申書のつもりで答申案を出したというのは、小田桐さんも認めてらっしゃる。答申書とすれば、書式も整えるということも踏まえて答申書として理事会に提出していただいて、次回以降、どのように扱うかというところから議論するというのがいががでしょうか」

川喜田「中身的には、これを受け取っていただいていると思うんです。ただ、手続きをもう一回やり直すということと、

今日は一回持ち帰って、もう一回みんなで叩くというか、それが新理事会に諮るということだと思えますので。今日全部結論を出す必要はないと思います。時間も必要だし。文言などは、坂本さんご指摘のところなどは、僕もメンバーながら

言われてみればその通りなので。もう一回時間をおいたほうがよいと」

坂本「理事会が答申を求めたわけでしょう。理事会が答申の中身に云々言わなくていいんじゃないでしょうか」

音「所感を述べさせていただきます。ギヤラクシー賞改革小委員会を作ろうという議論が始まったのは、去年の総会です。

んですよ」

小田桐「外国作品の問題とか、それは議論はしました。川喜田さんも意見を述べられましたし、小委員会の議事録にはあると思いますが、それは持ってきておりませんので、軽々なことは言えませんが。議論はしましたし、B S・C S・ケーブルテレビについても議論しました。現在の段階でも、B SもC Sもケーブルも、テレビにも報道活動にもエントリーが出て受賞もされているので、とくにそのことについては、詳しく詳細に載せる必要はないだろうということで、議論はまっています」

藤久「小田桐さんに異議を申しあげるわけではないんですが、桜井さんとも話しましたが、ギヤラクシー賞そのものの発展的方向を目指しての改革ということだと、各部門の委員長副委員長だけで構成されているのでは、視野狭窄に陥る可能性もあって、委員会の組織それ自体の問題も問い直されないとけないと思いませんね」

上滝「放送批評懇談会はサロンのなどところなので、フリートークで堅苦しいことは言いたくないのですが、僕は答申書をたくさん書きましたが、答申書は最初に必ず諮問事項を書くんです。どこそこか

その時にも申しあげましたし、その後第1回の理事会でギヤラクシー賞改革の話の小田桐さんがされた後にも同じことを申しあげたんですが、B S・C S・ケーブルテレビからギヤラクシー賞に多くのエントリーがはじめている。ギヤラクシー賞の権威を高めて、5年後10年後にギヤラクシー賞により多くのエントリーがきたり、ギヤラクシー賞の権威性が今まで以上に高まり、ギヤラクシー賞の社会的貢献度があがっていくですとか、ということを実現するためにギヤラクシー賞は改革されるべきだと私は思っております。

これも昨年申しあげたと思いますが、例えば外国から招待作品を招く、ギヤラクシー賞受賞作が海外の賞と交流するなど、ギヤラクシー賞が発展していくということとを、改革の際は検討していただきたいと述べさせていただきました。

今回のものは、多くの方々がたくさん時間をとってください、ご検討いただきましたが、今申しあげた部分については弱いかなと。議論はされたのかもしれないが、私も議事録は読ませていただいておりますが、その限りにおいては、その部分を得ることはできなかった。ギヤラクシー賞の改革をどこに求めるのか